

2005年(平成17年)9月1日(木曜日)

高知放送ラジオは、四日正午から、八月二十一日に土佐市で開かれたシンポジウム「仁淀川の森と水を考える」の模様を伝える特別番組「天然アユは生き残れるか」を送る。

特別番組 「天然アユは生き残れるか」

このシンポジウムは、仁淀川漁協が流域十市町村と漁業、農業など関係機関三十五団体に呼び掛けて開催したもの。仁淀

川のアユ漁獲量は昭和三十五年の四百七十六トをピークに昨年は九十トまでに落ち込んだ。その原因は山の荒廃をはじめ、

砂利採取、また工場や家庭排水など多岐にわたる。仁淀川漁協は「流域の住民、関係機関が一丸となる契機」として、

高知放送ラジオ 4日正午
「森と川と海をつなぐ学問(森・里・海連携学)」と題して基調講演した。番組では、県水産試験場の松浦秀俊技術次長が

「リバーキーパー」が仁淀川流域で立ち上がった。県内外に制度を広げたいと、今後運動に取り組むことを決めた。その動きも紹介する。

約三百五十人が参加した。シンポでは京都大学フィールド科学教育研究センター長の田中克氏が、新しいボランティア組織「リバーキーパー」が仁淀川流域で立ち上がった。県内外に制度を広げたいと、今後運動に取り組むことを決めた。その動きも紹介する。